

検号	
受番	(算用数字)
	志願校

(14-J) 第一回国語

注意 字数が指定されている設問では、「」や「。」も一ます使いなさい。

1 次の文章を読んで、①～④に答えなさい。

ヨットの練習をしているという人が、ヨットは向い風を受けて前に進むのだという話をした。逆風のことをその人は、コントラ・ヴェンテと呼んだ。よくはわからないが、ラテン語らしい。

なんとなく、帆船は追い風で進むように思っていた。⑦ 満帆ならよくわかるが、向い風で前進するという⑧のは、どうも無理なように思われる。実際にヨットが逆風を受けて前に進むというのは目ざましいことだ。

そういえば、魚は流れに向って泳いでいる。流れに乗った方が楽でよさそうなのに、流れをさかのぼる。流されるままになっているようなのは、死んでいるか、死にかけてである。生き⑨のいい魚は求めて逆流に向って泳ぐ。

⑩目ざましいのは鯉で、逆流どころか、滝をのぼる。それにあやかりたいというので、鯉のぼりを立てて子どもの節句を祝うが、鯉のぼりが⑪コントラ・ヴェンテの教訓を含んでいる⑫は忘れられた。

人が生きていくにも、逆風、逆境をおかして進む⑬のが正統的であろう。勞せずして、すすい進むものは、思いがけない転覆に見舞われる。コントラ・ヴェンテをくぐってきたものにはたくましい力が⑭具わっている。

(出典 外山滋比古「忘却の力」)

2 次の文章Ⅰは清少納言『枕草子』の一節であり、文章Ⅱは文章Ⅰについて解説したものである。これらを読んで、①～⑥に答えなさい。

I 村上の御時、雪のいと高う降りたるを、賜器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、兵衛の蔵人に賜びたりければ、「月雪花の時」と奏したりけるこそ、いみじうめでさせたまひけれ。「歌など詠まむは世のつねなり。かうをりにあひたることなむいひがたき」とこそ仰せられけれ。

(注) 兵衛の蔵人——兵衛とよばれていた女蔵人(宮中に仕えた下級女官)。

II ある、大雪の降った夜のころ、村上天皇は何を思われたか賜器と呼ばれていた器(白釉の陶器か。銀器もあつたらしい)に雪を盛つて、梅の花を押し、雪後の月が明るく照りわたっている中でこの女蔵人兵衛に下賜された。じつに美しいのだが、①いわくありげな心遣いプレゼントである。

こんな時、兵衛という女人はどう振舞つたらよいのだろうか。兵衛という名は当時の慣例によって、父兄が兵衛府の役人であつたからついた名である。一行の伝記もなく、この一話だけで今日に語り伝えられる兵衛は、とつさにただ「月雪花の時」とお答えしたのだ。

即詠の和歌でお答えしたわけではないが、帝はたいそうこれがお気に召して、「こういう場面で歌を詠むのは常識だが、私のプレゼントの趣向をよく心得て、この場にぴつたりの詩句がすぐ口をついて出たのは何ともみごとだ」とひじょうに②賞揚されたという。いかにも清少納言好みの気の利いた簡潔な返答である。この答えにはもちろん背景がある。当時の教養人が必ず読んでいた『百氏文集』にある白居易(乐天)の詩で、後には『和漢朗詠集』にも採録された著名な詩を、この時の兵衛は原典で読み記憶していたことになる。

白居易は「琴・詩・酒」を「三友」と呼ぶほど愛していたが、杭州や蘇州の施政官であつた頃はここに「琴・詩・酒」をたしなむ地方官僚との友好にはなつかしいものがあつたらしい。退任後、長安に帰つた白居易は杭州時代を回想しつつ、音楽の友、協律に宛てて詩作したのが、「殷協律に寄す」という詩である。

この中の詩句が、しだいに日本の風雅の精神の中枢をなすようになっていった。その中から人口に膾炙してゆく部分を書き下して抽出してみよう。

琴詩酒の友皆我を抛つ

雪月花の時最も君を憶ふ

〈中略〉

ところで、話を女蔵人兵衛に「戻すと、帝からの試問のようなプレゼントを前に、即詠して出来のよくない歌を詠み上げるより、この白居易の詩片の気韻の高さを活用した方が有効と判断したのかどうか。

より自然には、月、雪、花を揃えての試問に、一瞬にして高揚する詩精神を体験しつつ、白居易の詩片を口誦だとかえたい。むしろ、兵衛の意識には、「雪月花の時」という漢詩の格調がもつ、多少物知り顔にひびくこの言葉をも、どう和語的に言いかえるか、和歌風に言い直せるかという課題があつた。もちろん返答の一瞬にこもる課題である。兵衛の答えを「雪月花の時」としている本もある。しかし私は、能因本系によって伝わる「月雪花の時」という原典の詩句を一字逆転して訓読したこなれた音韻のやさしさを愛するし、兵衛の一瞬の思いはかりに、このくらいのゆとりがあつたことを信じた

(45分)

国I	
(2)	
計	

① 「⑦ 満帆」の に入れるのに最も適当なことばを、漢字・字で書きなさい。

② ⑧の部分(a)～(d)の語のうち、意味・用法の異なるものはどれですか。

③ 「目ざましいのは鯉で、逆流どころか、滝をのぼる」とあるが、「急流をさかのぼることができる鯉は竜になる」という故事から生まれ、「立身出世をなすための関門」という意味を表す故事成語は何か。漢字三字で書きなさい。

④ 「コントラ・ヴェンテの教訓」とは、どういうことか。文章中のことばを使って、「……ということ。」に続くように、三十文字以内で書きなさい。

ということ。

い。このちよつとした物言いの選択の中こそ、当時の才ある女房たちの、和歌物言いの洗練と成熟があつたと思うのである。

もう一つ言わねばならないのは、物言いの省略と余韻についてである。兵衛は白居易の詩語の半分までを言つてとどめ、「最も君を憶ふ」を余韻としてひびかせている。そこが憎いところであり、古詩を利用したことによつて言わなくとも伝わるのである。白居易の「憶ふ」は遠隔の地にある旧友へのなつかしさを憶っているのだが、身分の低い下級女官の兵衛は、はるかな高みの、及びもつかぬ帝への距離を憶いつつ、「月雪花」の折ふしにはいつもお憶い申し上げていると答えているのだ。

(出典 馬場あき子「歌説話の世界」)

(注) 白釉——白い上薬。兵衛府——宮中の守衛を行った役所。

白居易——中国の中唐期の詩人。代表作は「長恨歌」「琵琶行」など。

人口に膾炙してゆく——人々にもてはやされ、広く知れ渡つてゆく。

気韻——気品がある様子。能因本——『枕草子』の写本の系統の一つ。

① 線の部分⑦、⑧の漢字の読みを書きなさい。

⑦ ⑧ す

② 「かうをりにあひたる」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

③ 「いわくありげな」とあるが、このとき村上天皇が兵衛に期待していたこととして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 雪に挿した花を主題として隣時に歌などを詠み上げること。
- (2) 梅の花のお返しにすばらしい歌などを詠んで答えること。
- (3) 月、雪花が揃った状況にふさわしい歌などを即詠すること。
- (4) 月明かりの中で雪に挿した花を与えた理由を答えること。

④ 「殷協律に寄す」は、漢詩の原文の「寄殷協律」の書き下し文である。書き下し文の読み方になるように、「寄殷協律」に返り点をつけなさい。

寄 殷 協 律

⑤ 「和歌的……あつた」とあるが、筆者は、兵衛の返答のどのような点に「洗練と成熟」を感じ取っているか。それを説明した次の文の に入れるのに適当なことばを、文章Ⅱの中から六字で抜き出して書きなさい。漢詩の詩句を一字逆転し、 で和語的に言いかえて答えた点。

⑥ 「古詩を……伝わる」とあるが、どのような気持ちで伝わるのか。それを説明した次の文の に入れるのに適当なことばを、A は四字で、 B は十字で、それぞれ文章中から抜き出して書きなさい。

A のことを B という気持ち。

A B

検号	(算用数字)	志願校
受番		

(14-J)

(2)

3

十三歳の嘉穂は幼い頃に母を亡くしており、弟の穂高と一緒に、父方の相父母と叔母の博美おぼちゃんの住む家で暮らしている。父は数年前に転勤先の他県で再婚し、幼い二人の女兒を得て新しい家族と生活している。次の文章は、嘉穂が、親友のひとみの付き添いで出かけた音楽教室で歌のレッスンを受けた数日後、博美と一緒に飼った犬のキャンの散歩に出たときの場面である。これを読んで、①～⑦に答えなさい。

「ひとみママとお茶してきた」
 突然、嘉穂の頭の中に黄色信号がともった。
 「いつ？」
 「こないだの木曜日」
 「ふーん」
 「嘉穂、あんた、歌、習いたい？」
 前置きも説明もなく、いきなり⑦をついてくる。おぼちゃんのやり方には慣れているはずなのに、返事ができなかった。
 「ひとみママ、ひどく、燃えてたよ。ひとみちゃんがおおげさに話したみたい」
 「ひとみ、おせっかいなんだから、自分に関係ないんだから、ほっといてくれればいいのに」
 「そう言いなさんな。娘の友人の一大事だつてさ。笑つちやうね。あたしは全然知らなかったのにね」
 ④おぼちゃんの声がかくもっていた。
 おぼちゃんは嘉穂の学校の保護者会には大学の仕事を休んで必ず出席してくれる。中二になったばかりのとき、もうしわけなくて、お知らせのプリントを渡さなかったことがあった。そしてたらひとみママから連絡がいった。めずらしく、本気で叱られた。
 嘉穂には遠慮がある。おぼちゃんは嘉穂や穂高を育てるために結婚もできないでいる、と嘉穂は思っている。だから、なるだけ迷惑をかけないように、知られないように、そして離れようと努力している。
 おぼちゃんがススキの穂をちぎった。
 「心配してんだよ。これでもさ。嘉穂がこのごろ、硬い殻で覆われちゃったみたいでさ。なんて声をかけたらいいかわかんなくなっちゃった。前はそんなことなかったのにな」
 ここはなんとかおぼけるしかない。嘉穂は頭の中でとぼしいジョークをさがしはじめた。
 「あたしね、人工衛星になったみたい気分になつてるの。嘉穂のまわりをぐるぐると。なんか言うとか正直な言葉とはうらはらに、むつとした顔をするし、手伝おうとすると、いらないうつて言つてはねのけられる。目だけは離さないでいようと思つて、ぐるぐると嘉穂の周りを回つてる……」
 (ますい。とにかく、これはますい)
 「は、反抗期ですから」
 声が粘つてしまった。
 おぼちゃんがススキの穂で頭を叩いた。
 「大きくなつちやつたんだね。頭たたくのに、腕をのばさなくちゃいけないなつちやつたなんてさ」
 おぼちゃんが目を細めて嘉穂を見た。
 「ところで、反抗期つてのは、終わるものなの？」
 「わかんないよ。そんなこと」
 「だよね」
 おぼちゃんがふふふと笑っている。
 「これだけは言つておくよ。歌、やりたくないんならやれとは言わないけど、やりたかつたら是非是非やつてほしい。なんにも気にすることなんかないんだよ。お金だつて、お兄ちゃんから送られてきてるんだしさ」
 「うん」
 急に心配になった。
 ⑥「お父さんに言つたの？」
 あれ？ という顔でおぼちゃんが顔をのぞきこんできた。
 「言つてないよ。だつて、あたしにだつて言いたくなかつたことですよ」
 ほつとした。お父さんには知られなくなかつた。何も告げないことが心配をかけないいちばんの方法だと嘉穂は思っている。
 「迷つたらやつてみる。これ、若さの⑤トクケン。まだ、あたしにも適用するかなあ」
 嘉穂は笑いだした。おぼちゃんらしく、前向きだ。
 返事ができない。
 「迷つてんの？」
 首をかしげた。
 「じゃ、決まり。やつてみなよ。後藤先生たつけ、あたしから連絡とつてみるから。ひとみママから聞いているから」
 ひとみママはどこまでも④だ。その後ろにはひとみがいる。似た

もの同士之母と娘だ。
 (ひとみに余計なこと言わないでよつて、文句いわなくちゃ)
 でも、おかげで歌が習える。これはちよつとした出来事だ。おさえつけていた柔らかいボールにおしかえされるように、心が歌にむかつていく。
 声をだす。心が空っぽになる。体の中に風が吹き渡る。気持ちがよかつて、おながすく。そんな時間を④スゴすことができる。

(最高！)
 「キャン、おいでえ！」
 ④声があいつになくはずんでいた。

(出典 にしがきようこ「ピアチエール 風の歌声」)

- ① ひとみママ——ひとみのお母さんのこと。
 ② 線の部分④、⑦を漢字に直して楷書で書きなさい。
 ③ ⑤ ⑦ ⑧
- ④ ⑦に入れるのに最も適當なことは、(1)～(4)のうちではどれですか。
 (1) 盲点 (2) 不備 (3) 意表 (4) 核心
- ⑤ 「おぼちゃんの声がかくもっていた」とあるが、その理由を説明したもののとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
 (1) 自分より他人のほうが嘉穂のことを知っているのが寂しかったから。
 (2) 嘉穂が自分に反抗的な態度をとつているのを不愉快に感じたから。
 (3) ひとみママに嫌みを言われたことに気づいて傷ついたから。
 (4) 嘉穂に不自由な暮らしをさせていることがつらかつたから。
- ⑥ 「お父さんに言つたの？」とあるが、嘉穂が歌の件を父親に内緒にしておきたかつたのはなぜか。その理由を二十字以内で書きなさい。
- ⑦ ④に入れるのに最も適當なことを、文章中から五字で抜き出して書きなさい。
- ⑧ 「声があいつになくはずんでいた」とあるが、ここに至るまでに嘉穂の気持ちはどのように変化したか。それを説明した次の文の に入れるのに適當なことを、 I は文章中から二字で抜き出し、 II は十五字以内で書きなさい。
 嘉穂は、祖父母や博美に対する I から、自分の本当の気持ちを見せないようにしてきたが、博美との会話を通して II が解放され、喜びと期待でうきうきとした気持ちになった。
 I II
- ⑨ 中学生の健二さんと由美さんは、この文章の表現について批評した次のような会話を交わしました。会話文中の に入れるのに適當なことを、 I は後の(1)～(4)から選び、 II は文章中から十五字以内で抜き出して、初めと終わりの五字を書きなさい。
 (健二) この小説には、たとえを用いた表現がたくさん使われていて、登場人物の心情や様子が効果的に描かれていると思うんだ。
 (由美) 確かにそうね。例えば、「頭の中に黄色信号がともった」は、嘉穂の I する気持ちが視覚的に表現されていておもしろいわね。ほかにも、「硬い殻で覆われちゃったみたい」というたとえは、迷惑をかけたくなくて、「おぼちゃん」からできるだけ離れようとしている嘉穂の様子がよく伝わってくるわ。
 (健二) そうだね。そして、そんな嘉穂の様子を周りからただ見ているしかない「おぼちゃん」の気持ちが、「 II 」と表現されているよ。これも心情をたどった巧みな表現だね。
 (1) 注目 (2) 警戒 (3) 期待 (4) 反発
 I II

検号	
受番	
(算用数字)	
志願校	

(13-J) 第二回 国 語

注意 字数が指定されている設問では、「」や「。」も一ます使いなさい。

1 次の文章を読んで、①～④に答えなさい。

人生において最も楽しいひとときは——と問われたなら、私は何と答えるだろう。あれこれ考えたすえ、やはり、本を読むとき、というだろう。

という、私は①いかに読書家のようにだが、じつはその反対である。読もう、読もう、と思いつながら、なかなか本が読めないでいる怠惰な人間なのだ。というのは、べつに忙しいからではなく、本を読むに際しての私なりの条件がむずかしいからである。

これには——何も責任をひとに押しつけるつもりはないが——『徒然草』の筆者に、いささかの責任がある。兼好法師は②こう書いているのだ。

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなくさむむむなる。

文は文選のあはれる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれること③おほかり。

(第十三段)

中学生のころ、④この一文を国語の教科書で読まされて以来、私は「書物」というのはこのようにして読むものかと思こんでしまったのである。つまり、「ひとり灯のもとに文をひろげて」である。そうでなければ、⑤とても

2 次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。

話すときも書くときも、表現者は二つの別の方向から最適なことばに①迫る。何を伝えるかという意味内容の選択と、それをとんな感じで相手に届けるかという表現の選択である。

「時間」と「時刻」、「美しい」と「きれいだ」のような似た意味のことばでも、細かく調べるとそれぞれの用法には違いがあり、日本人はその微妙な意味の差に忠実に使い分けていることがわかる。

一方、「あした」と「あす」と「明日」、「親戚」「親族」「親類」「縁者」「身内」「身寄り」などには、はつきりとした意味の違いがほとんどない。が、いつどれを使ってもいいわけではない。場面や状況によってそれぞれ適不適があり、感じの違いもある。日本人は意味の微差だけでなく、そういう微妙な感覚の違いに忠じた使い分けにも細かく神経をつかう。

世間一般の用語に従って、その二つの面を「意味」と「語感」と呼び分ける。「意味」はその語が何を指し示すかという②な情報を伝えるハードな面であり、「語感」はその語が相手にどういった感觸・印象・雰囲気を与えるかといった③な情報にかかわるソフトな面での表現選択だ。④前者の選択があまいと意味があまいになり、後者の選択を誤ると思わぬ違和感や不快感を招きかねない。

とはいえ、「意味」と「語感」には連続的な部分があり、現実には明確な区別のむずかしい例も多い。「語感」というものにそういう微妙な「意味」の問題をも含めて、「ニュアンス」ということばで表現することもある。

伝えたい内容を意図どおりの感じで相手に送り届けるため、だれでも無意識のうちにこのハードとソフトの両面から表現をしはっている。言語表現のプロに近づくほど、意味も語感も最適な一つのことばを早く的確に選び出すようになる。それが⑤日本語のセンスである。

こうしたことばに対するセンス、すなわち、類義語や関連語の微妙なニュアンスなどを識別する能力としての「言語感覚」はどのようにして生まれ育ち、みがかれるのだろうか。名文の評価高い永井龍男の短編『そばやまで』は「⑥住まいのことでは、一時思い屈した」という一見何でもないみじかい一文で始まる。「家」でも「住居」でも「住宅」でもなく「住まい」とあり、「弱った」でも「困った」でも「参った」でも「悩んだ」でもなく「思い屈した」とある。

その場にびたりとはまり、自分の気持ちにじっくりとくる最適な語が選ばれているのだろう。そういう選択はこの作家の深い文章体験で築かれた鋭い勘によつて行われている。言語感覚を鍛えるには、こういう勘の利いた文章を意識的に読むのが効果的だ。⑦漫然と眺めるのではなく、ここになぜこの語があるのか、他の類義語とどこがどう違うのかと、時につかかってみるとさらに効果がある。といつても、いちいちつかかっている日は暮れるから、うまい表現だなどと思つた箇所をせめて一瞬立ち止まってみよう。

そのように、⑧ある表現のニュアンスを他と比較する際のコツが二つある。一つは、一方が使えて他方が使えない、もしくは不自然になるような例を見つけること。もう一つは、両方使えるがニュアンスが明らかに異なる例を考

(45分)

国(1)		
(2)		
計		

「⑨」ことはできない、だから電車のなかとか、待合室とかなどで本は読むべきではない、と。(出典 森本哲郎「読書の旅」)

(注) こよなくさむむむなる——このうえなく心が安まることである。文選・白氏文集・老子のことは・南華の篇——いずれも中国の古い書物。

① 〰の部分①、②の語のうち、異なる品詞のものはどれですか。

② 「⑦おほかり」を現代かなづかいに直して、すべてひらがなで書きなさい。

③ 「書物というのは……読むものだ」とあるが、いつ、どのような状態で読むのか。五字以内の現代語で書きなさい。

④ ⑨に入れるのに最も適当なことばを、『徒然草』の文章中から十字で抜き出して書きなさい。

えてみる。そんなふうに④表現を味わつてみる日ごろのトレーニングを通じて、言語感覚が自然に鋭さを増すことだろう。

(出典 中村明「語感トレーニング—日本語のセンスをみがく55題」)

① 〰線の部分⑦、⑧の漢字の読みを書きなさい。

② ④、⑤に入れるのに適当な語句の組み合わせは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 間接的—直接的 (2) 主観的—客観的
(3) 積極的—消極的 (4) 論理的—心理的

③ 「④前者の選択」を具体的に説明している部分をここより前の文章中から探し、十六字で抜き出して書きなさい。

④ 「④日本語のセンス」とあるが、筆者の考える日本語のセンスとはどのような能力かを説明した次の文の〰に入れるのに適当なことばを、文章中のことばを使って三十字以内で書きなさい。

自分が相手に伝えたい〰を早く的確に選び出す能力。

⑤ 「⑥住まいのことでは、一時思い屈した」とあるが、これはどんな文かを説明したものとして最も適当なものは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 一見何でもない文に見えるが、実は長い時間をかけて書かれた文。
(2) 鋭い勘によって、意味も語感も最適な語が選択された文。
(3) 短い一文だが、伝えたい内容を素早く相手に伝えられる文。
(4) 類義語の持つ意味や語感とは、微妙に違つている文。

⑥ 「⑦ある表現のニュアンスを他と比較する」とあるが、これとほぼ同じ内容を表している語句を文章中から八字で抜き出して書きなさい。

⑦ 「⑦表現を味わつてみる日ごろのトレーニング」とあるが、この「トレーニング」によつてどのような能力がみがかれるのか。文章中から二十五字で探し、初めと終わりの五字を抜き出して書きなさい。

検号	
受番	
(算用数字)	
志願校	

(12-J)

第三回 国 語

(45分)

国1			
(2)			
計			

1 次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。

梅の花の香りについては、ほとんど⑦にいとまのないほど『源氏物語』には登場してきますが、なかで、光源氏が梅の花を手にして紫上に見せながら、

花と①いはば、④かくこそ句はまほしけれな。(若菜・上)

というところがあります。(花という以上は、このくらい、いい香りがしてほしいものだね)といつて、ついでに桜の花に香りの⑤ないのを惜しがっている場面です。当時の人にとっては「花の香」といえば、ほとんどまちがいでなく「梅」をさしているくらいで、⑥と⑦とは切り離せないのです。「花」といえば「桜」に意味が限定されてくるのはもう少し時代が下つてからのことで、『源氏物語』では、もちろん桜を「花」ということでもあります。また、「花の香」「花の枝」「花の色香」など、明らかに「梅の花」をさしている場合が多くみられます。(出典 尾崎左永子「源氏の薫り」)

① ⑦に入れるのに最も適当なことは漢字二字で答えなさい。

⑦ にいとまのない

2 小学五年生の女の子の「わたし」が、保健室のヒデコ先生(ヒデおば)のもとを訪れると、困難な手術のために入院することになっている、小学一年生のたつちゃんがいた。次の文章はそれに続く場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

ヒデおばはたつちゃんの両親ともう少し話をしてから、カーテンを開けた。横からお父さんが「たつちゃん、ヒデコ先生にお別れしなさい。」と言った。「いままでお世話になりましたって。」お母さんは黙つて、ハンカチを目元にあてていた。たつちゃんはお別れの意味がよくわからないのか、きよとんとしてうなずき、「ヒデコせんせい、またね。」と手を振るだけだった。こつちのほうがつらくなって、たつちゃんの手術のことが心配にもなつて、胸が熱くなった。口の中でドロップスが溶ける。悲しみの涙が溶けて、広がって、染みていく。ヒデおばは、白衣のポケットに手を入れた。「たつちゃん、もうハッカのドロップス食べた?」「うん、おいしくないからんじやった。」「じゃあ、お別れだから、もう一個あげる。」緑の缶をポケットから取り出して、カラカラ、と音をたてて振つた。「たつちゃんがいちばん欲しいドロップス、言いなさい。それが出たら、手術が成功して元気に遊べるよ。」うそし。だめ、それ。「ぼく、ブドウがいいなあ。」

わたしはあわてて口の中のドロップスを呑み込んで、ヒデおばに、だめです、やめてください、と言おうとした。でも、オレンジの甘みで口の中がべたべたして、呑み込んだドロップスも喉にひっかかったみたいで、④声が出ない。「なにが出てくるかわかんないけど、ブドウだったら、うれしい?」「うん。」「先生もうれしいけどねえ、どうだろうねえ、うまいくかどうかわかんないよ。」そんなのやめて、ゲームにしないで。絶対に負けるゲーム、たつちゃんにやらせないで。

ヒデおばは蓋を開けた缶をまた軽く振つて、たつちゃんの手のひらに、ころん、とドロップスを落とす。紫色のドロップス——「やったー。」とたつちゃんは歓声をあげた。ブドウ。間違いない。あの色、あの形は、ブドウのドロップスだった。赤い缶のやつにしか入っていないブドウが、緑の缶から出てきた。お父さんとお母さんも手を取り合つて大よろこびだった。やったな、やったね、すごいな、よかったね、と二人とも涙声でよろこんでいた。

たつちゃんは、あーん、と口を大きく開けて、ブドウのドロップスを舌の先にのせた。口を閉じて、べろん、べろんとなめて、「おいしいつ。」と笑つた。きつと、その味、⑤だ。そして——何週間か、何ヶ月か、何年先かわかんないけど、たつちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合つてうれし涙を流すんだろうな、と思つた。信じている。不思議な奇跡が起きたのだから、それ、信じていい、と思う。

たつちゃんが両親と一緒に帰つたあと、ヒデおばは「あんたも食べる?」とドロップスの缶を差し出した。「あの……。」やっぱり⑥不思議だった。「なんでブドウが出たんですか?」「なんでって、入つてたから出たんでしょ。」缶を受け取つて、手のひらに出した。びつくりして、残りのドロップスも手のひらに出した。ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ……。ぼうぜんとしている隙には、ヒデおばは机のひきだしを開けて、赤い缶のドロップスを取り出した。「たつちゃんがブドウが好きだつていうの、聞いてたから。」ヒデおばはそこから出して……こつちに入れたんだ。だか

② 「いはば」を、現代かなづかいに直してすべてひらがなで書きなさい。

③ 「かくこそ」の現代語訳に当たる部分を、文章中から抜き出して書きなさい。

④ 「ない」とあるが、これと同じ用法のものは、次の(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) うそつきは、許せない。
- (2) 我ながら、情けない。
- (3) 自分には、時間が足りない。
- (4) けつして、後悔しない。

⑤ ⑥、⑦に入れるのに最も適当なことを、文章中からそれぞれ一字と二字で抜き出して書きなさい。

⑥ ⑦

ら、オレンジとハッカのドロップスは最初から外に出ていたんだ。最後にたつちゃんがドロップスをなめるときには、ぜんぶブドウになるように。うれし涙のドロップスをお別れにプレゼントできるように。

(出典 重松 清「ドロップスは神様の涙」)

① 線の部分⑦、⑧の漢字の読みを書きなさい。

⑦ ⑧

② 「声が出ない」とあるが、声が出たら「わたし」はどのように言うつもりだったのか。文章中から抜き出して書きなさい。

③ 「ゲームにしないで」とあるが、ゲームにすることはどういうことか。これを説明した次の文の に入れるのに最も適当なことを、文章中のことは使つて二十字以内で書きなさい。

缶から、たつちゃんの好きな によって、たつちゃんの手術の成否をうらなうこと。

④ ⑨に入れるのに最も適当なことを、ここより後の文章中から四字で抜き出して書きなさい。

⑤ 「不思議だった」とあるが、「わたし」は何がどうなつたことが「不思議だ」というのか。文章中のことは使つて三十五字以内で書きなさい。

⑥ 文章中の内容と合っていないものは、次の(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) これから困難な手術をしなくてはならないことに対して、周りのみんなは心配しているが、たつちゃん本人はさほど不安を感じていない。
- (2) たつちゃんの手術を不安に思うみんなを元気づけるため、ヒデおばはとつさの思いつきで手術結果をうらなうことにした。
- (3) たつちゃんが出ると言つたブドウのドロップスが缶から出てきたときには、たつちゃんだけでなく、たつちゃんの両親も大喜びした。
- (4) 缶から、たつちゃんの好きなブドウのドロップスが出てくることを、缶からドロップスが出てくる前からヒデおばは知っていた。

検号	(算用数字)	志願校
受番		

(12-J)

(2)

3 次の文章を読んで、①～⑧に答えなさい。

子供のころ、よくお使いに行かされた。家と家とのつきあいにかかわる使者としての役目を持つお使いもあった。家の人から、相手の家を訪れたときのおしぎの仕方、あいさつの口上を教えられた。「私は、石毛から参りました。本日は……」といったような、覚えただけの、形式ばった口上をただどしく話す私に、先方は笑いもせずに「これは、これは、御苦勞様です。」と大人に対するのと同じような口調でまじめに対応するのであった。「型どおり」にふるまったときには、子供も一人前として認められたのである。

礼法や茶室での作法に見られるように、日本の伝統的な立ち居ふるまいは、型を重視する。型を完全にマスターしたのち、非常に才能のある者だけが、「型やぶり」をして、自由な自己表現をすることがユルされるが、型やぶりは非難の対象とされることが多い。そのかわりに、型どおりにすれば、だれでもが恥をかかずに一人前にふるまうことが可能なのである。決まり切った型の枠内でふるまう限り、村等に扱われたのである。

規範としての約束事が型である。あいさつ、手紙の書き方、身のこなし方など、社会的コミュニケーションの場面で、型が機能するだけではない。型にのっとりふるまうことは、日本文化を特徴づける表現様式であった。したがって、伝統的な芸術にも、型の概念がかかわってくる。

伝統的な日本料理は、「目で楽しむ料理」としての性格が強い。左右対称形に料理を盛るヨーロッパや中国に対して、日本料理では奇数を重んじる盛りつけをしてアンバランスの美をツイキユウする、料理に季節感を表現するなど、日本文化独自の美学を懐石料理に読み取ることができる。それを見た外国人が、「これは芸術家の作品だ。」と感嘆したりするが、板前にしたら、伝授された型にしたがいながら仕事をしているだけのことである。職人として、きちんと修業し、型を守っていたら、だれでも芸術性を表現できるのだ。

能、人形浄瑠璃、歌舞伎など、古典芸能といわれるものは、型の芸術である。舞台芸術でのクライマックスのときの、「瞬静止したポーズ」が型であると思われがちである。しかし、それは型の一部分であるというに過ぎない。舞台での劇的な見せ場を作るための一連の様式化された、しぐさや、せりふの口調などによる人体表現が型である。別の言い方をしたら、見せ場のパターン化された演出の仕方である。それが、役者にとっての見せどころであり、その様式を心得た観客にとつての「か」である。日本の古典芸能は、様式の美学によつて成立している。

演技者は、はじめは先輩に教えられた型にしたがって演技を学ぶ。そのうち、才能のある者は伝承された型をさらに洗練させ、自分の型を作り出す。それが好評を博すると、だれだれの型という名で次代に継承されるのだ。天才的な演技者にとって、型は型やぶりをするために存在するものかもしれない。

日本の伝統文化において、様式の美学は今なお健在である。しかし、日常生活では、型の文化が失われつつある。たとえば、手紙がそうである。時候のあいさつを織り交ぜた型どおりの文例にのっとり、だれでも手紙を書くことができた。それが、今では、手紙を書くことよりも電話やメールを使うことの方が多くなった。伝統的な食事作法は、正座をして、銘々膳に向かつて、箸だけを使って食べることを前提としている。いすに腰掛け、ダイニング・テーブルで箸とナイフやフォークも併用し、和洋中の様々な料理が並び、現代の家庭における食事作法は、教えてくれる人がいない。時代が変わって行く中で、現代生活にふさわしい型を創出していかねばならない

時期に、今きているのである。 (出典 石毛直道「型の美学」)

(注) 懐石料理——茶の湯の席などで出す料理。

① ー線の部分④、⑤を漢字に直して楷書で書きなさい。

④

される

⑤

② 「覚えただけの……対応する」とあるが、これと同様のことをまとめて述べていることばを、文章中から七字で抜き出して書きなさい。

「私」は大人から

③ 「非常に才能のある者だけが、「型やぶり」をして」とあるが、「型やぶり」をするとは具体的にはどうするのか。それが述べられた部分を文章中から二十五字以内で探し、初めと終わりの五字を抜き出して書きなさい。

④ 「それ」が指す部分を文章中から探し、初めと終わりの五字を抜き出して書きなさい。

⑤ ⑦に入れるのに最も適切なことばを、四字で書きなさい。

⑥ 「現代の家庭に……人がいない」とあるが、筆者はこのような現状をどのようにとらえ、その結果どのようにしていかなければならないと考えているか。文章中のことばを使って四十字以内で書きなさい。

いかなければならない。

⑦ この文章の内容と合うものは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 日本人が大切にしてきた「型の文化」は、時代が進み食事のスタイルや情報の伝達手段が多様化する中、社会のあらゆる分野で衰退してしまうこととなった。
- (2) 職人としてきちんと修業し、「型」を守っていたら、だれでも芸術性を表現できることからわかるように、日本人は「型の文化」を持たない国の人より芸術的な民族だと言える。
- (3) 「型」というものは、行動や判断の基準となる約束事であり、この「型」は人々が自分の思いや考えを表現する場合だけでなく、日本文化を特徴づけるものでもあった。
- (4) 日本の文化を特徴づける「型の文化」こそが日本文化の根幹をなすものなので、これからは礼法や食事の際の作法など古くからの習慣を守っていかなければならない。

⑧ 「型」に対するあなたの意見文を、百五十文字以内で書きなさい。なお、あなたの考えが的確に伝わるよう、その根拠となる具体例を含めなさい。

検号 受番	(算用数字)	志願校
----------	--------	-----

(11-J)

第四回 国 語

1 次の文章を読んで、①～④に答えなさい。

動物でも敵の接近を仲間知らせる合図の方法をもっているものがある。これは実体のある言語と性格においては似ているといつてよい。ところが、来もしない敵が来たように合図する動物は①まずないであろう。襲うように見せかけて、実は逃げて行く動物があつて、こういう「フエイント」は一種のウソと言えないこともないではないが、それらは、動物の自己防衛の自覚のあらわれで本能的なものとは考えにくい。動物には実の世界のみ存在して、虚の世界はほとんど②発達である。

スポーツでは、たとえば、バレーボールを見ていると高度の技術に達したチームは「フエイント」によって相手の③を④について効果をあげる。

(出典 外山滋比古「日本語の論理」)

2 次の文章は、十一、二歳であった「わたし」が、八月の終わりに、避暑に来ている砦家の一人娘を美しい少女として見いだしたときのことである。少女の名前はきぬ子で、村の子供たちは散歩するきぬ子を見かけるとはやしたた。そのがき大将は「わたし」だった。これを読んで、①～⑦に答えなさい。

「魚屋の離れに、この魚を屈けてこい。」
わたしは父から命じられた。
「取れたての、どれどれですつて言つてな。そして五十銭もらつてこい。」
そんなふうに父は言った。

夕方だった。わたしはしりごみした。その魚は、砦家から今朝父が依頼されて釣ってきたものであることは、わたしも知っていた。しかし、毎日のように彼女をやつつけているまえば、わたしには彼女の家に行くことはありがたい④役目ではなかった。

わたしはなんとか理由をつけて、この役目から⑤放棄されようと思った。しかし、
「行つてこいと言つたら、行つてこい。」
と父から頭を一つこづかれると、その命令に従う以外しかたがなかった。

わたしは二、三匹の魚を入れたざるを持って、砦家へ出かけていった。角屋の表門から入り、勝手口の横を通つて、離れの縁側の方へ回つていった。

「魚を持ってきました。」
わたしは縁先の物干しの棒のところに立ち止まって、よそゆきの⑥言葉で言った。そこからは内部がのぞかれなかつたので、家の中に、だれがいるか全然わからなかつた。わたしはただ家の内部へ向かつて、声をかけたのであつた。

なんの返事もなかつた。
「⑦」
今度は、わたしは大きい声で叫んだ。

と、砦きぬ子の顔が縁側からのぞいた。
「あら、お魚？」

彼女は言うのと庭へ降りてきて、ざるの中をのぞき込み、
「まだ生きてるわ。」
そう言つてから、

「お母さん、お魚ですつて！」
と奥に叫んだ。

「なんていうお魚。」
彼女は言った。

⑧わたしは口がきけなかつた。彼女はわたしより少し背が高かつたが、近くで見ると、⑨いつもわたしが思つていたよりずっと子供っぽかつた。

わたしがざるを地面の上に置くと、彼女はそのにかがみこみ、小さい棒切れを拾つて、それで魚の肌をついた。そんなことをしている彼女を、わたしは上から見下ろして見ている。わたしはそれまでに、そんなきやしやな白い手首を見たことはなかつた。首も細く、その細い首の上におかっぱの髪がきちんとしてそろえて切られてあつた。

まもなく、彼女の母親が、これも縁側から降りてくると、
「ご苦労さんね。お幾ら。」
と言つた。わたしはこの魚の代金を受け取るのが、何か恥ずかしかつた。

⑩ひどく卑賤な行為のような気がした。
「いいです。」
とわたしは言った。

「よくはないわ。お幾らですつて。」
「父ちゃんがあけておいでつて！」
わたしは憤つたように言つた。すると、

「まあ、それは、お気の毒ね。よくお礼を言つてちょうだいね。」
彼女の母は言った。わたしが彼女の母と話をしている間に、きぬ子はわたし

のところから離れ、縁側から部屋の中に上がつていった。
わたしはそこを立ち去る時、初めて離れの家の中をのぞいた。きぬ子が南向きの縁側に面した部屋の⑪隅で、小さい机に向かつていた。その後ろ姿だけが、わたしの目に入った。何か雑誌でも読んでいる様子だつた。
わたしは夕食の時、父からひどくしかられた。わたしは代金の五十銭を、途中でどこかへ落としてしまったことにしていた。

(出典 井上靖「晩夏」)

① —の部分⑦、⑧の漢字の読みを書きなさい。
⑦ ⑧

② 「役目」のように重箱読みをする熟語は、③の部分④～⑥のうちではどれですか。
④ ⑤ ⑥

③ ⑦に入れることばとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 魚を持ってきました。 (2) 魚を持って——。
(3) 魚を持ってきました？ (4) 魚を持ってきた！

④ 「わたしは口がきけなかつた」とあるが、その理由を説明したものとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 届けにいった魚のなまえをきぬ子に聞かれたが、その魚のなまえがわからなくて困つたから。
(2) 届けにいった魚に興味を持つたきぬ子に接して、思つたより子供っぽくてがっかりしたから。
(3) 魚を届けにいっただけなのに、きぬ子と初めて言葉を交わすことになつてしまい緊張したから。
(4) 魚を届けにいった自分に対して、きぬ子が見下したような態度をとつたことにびつくりしたから。

⑤ 「いつも」がかかっている語として最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) わたしが (2) 思つていたより
(3) ずっと (4) 子供っぽかつた

⑥ 「ひどく卑賤な行為のような気がした」とあるが、どうすることを「卑賤な行為」と思つたのか。「……こと。」に続くように、文章中から十字以内で抜き出して書きなさい。

こと。

⑦ この文章からわかる「わたし」のきぬ子に対する気持ちを説明したものとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 家を訪ねたことで、きぬ子と間近に接し、好きな気持ちがいつそう強まっている。
(2) 体が弱いために家の中にずっと閉じこもっているきぬ子を、気の毒に思つている。
(3) きぬ子が好きでたまらないが、地元の子供たちを見下す冷たい態度にいら立っている。
(4) 避暑に来ているわがままなきぬ子のふるまいを見て、前より嫌になつてきている。

(1) (2) (3) (4)

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

検 号	(算用数字)	志願校
受 番		

(11-J)

(2)

3 次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。(1～7は段落番号を表す。)

① 明治以降、日本が政府によって統一されて以来、共通語というものがどうしても必要になった。どこの地方へ行っても通じる言葉を普及させようということで、非常に力を注いだのである。そして、それがあつという間に全国に普及したということは、世界でも非常に注目すべきことである。

② 方言の違いが激しいにもかかわらず、日本はどこへ行っても共通語が通じる。私は方言を研究してはいるが、実際、農村や漁村で使われている言葉は、聞いてもわからないものが多い。ところが、その土地の人はよその地方から来た人だと思えば、共通語で話してくれる。しかし、東京の間にはこういう真似はできない。東京の言葉が共通語だと思っているから、ほかの地方の言葉を使おうとはしない。しかし、東京以外の地方はすべて自分の方言と共通語と両方使い分けている。これは実に大したものである。

③ 日本では、共通語と方言の違いが相当激しい。これがヨーロッパあたりへ行くと、スペイン語とポルトガル語の違い、青森県の言葉と福島県という言葉ぐらゐの違いしかない。それでも二つの国語である。ちよつと聞くと、スペイン語とポルトガル語が話せるなんていうのは、何か非常に偉いような気がする。しかし本当は、青森県の言葉と共通語が話せるということは、もつと違った言葉を使い分けることができることなのである。よく日本人は語学が下手だと言われるが、これは大間違いで、日本人の方が語学の天才かもしれない。

④ さて、日本語の未来ということを考えると、共通語がどんどん普及していくのはけっこうなことかも知れないが、困ったこともある。今後は、方言がどんどん衰退していつてしまいうたからだ。共通語というものが、方言を放逐してしまつて、我々の話す言葉が共通語だけになってしまうことが、果たしていいことなのだろうか。これは大いに考えなければいけない。というのは、共通語にはいろいろな問題があるからだ。共通語というものは、大体東京の言葉が基本になっている。東京の言葉が万能ならば文句はないのだが、そうとも言えない。東京の言葉というものは、東京という都会に住んでいる人間の間に生まれた言葉であるために、どうしてもきめ細かい表現が足りないのである。

⑤ 日本中で雪が最も降ると言われる新潟県へ行くと、雪に関する語彙が非常に発達している。雪の生活が非常に長い地方では、雪の降り方を見ているいろいろな名前をつけている。こういった言葉はその地方になくはならないものであり、いくら共通語が盛んになつたからといって、これをなくしてしまうことはできない。またなくしてはいけない。キチヨウな言葉である。南の方へ行くと、たとえば鹿児島あたりは、カツオの漁が盛んなのでカツオにいろいろな名前がついている。

⑥ このようなことから、東京という都会に発達した言葉だけでは、東京以外の人の生活を言い表すための言葉は当然足りなくなつてしまふ。共通語というものは、もつともつと方言から栄養分を取り入れて、豊かなものにならなければいけないということになる。

⑦ 今日、共通語が、日本の代表にふさわしいものになるためには、地方の言葉から豊富な言葉を取り入れる必要があるように、私は思う。それがすばらしい日本語を作つていくための土台になつていくだろう。
(出典 金田 春彦「日本語を反省してみませんか」)

(注) 放逐＝追い払ふこと。

語彙＝ある分野や社会・地域で用いられる語の集まり。

4 次の漢文と書き下し文、および現代語訳を読んで、①～④に答えなさい。

之を得ること艱難なれば、得^ユ之^ノ艱^ク難^シ、

則ち之を失ふこと①。則^チ失^レ之^ヲ不^レ易^シ。

之を得ること既に易ければ、得^ユ之^ノ既^ニ易^シ、

則ち之を失ふこと亦然^リ。則^チ失^レ之^ヲ亦^シ然^リ。

(出典 蘇軾「范文子論」)

〔現代語訳〕 手に入れることが難しければ難しいほど、それを捨てることは容易ではない。手に入れることがとても簡単だと、それを捨てることもまたそうである。

① 「則ち」とあるが、「すなはち」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

① —の部分(土)を漢字に直して楷書で書きなさい。

(土)

--

 (オ)

--

 又は

② 「くれる」を尊敬の表現に直して書きなさい。

--

③ 「日本人の方が語学の天才かもしれない」とあるが、なぜか。「スペイン語」「ポルトガル語」という二つのことばを使って、五十字以内で書きなさい。ただし、「日本人は、……」という書き出しで書き、「……から。」と結ぶこと。

日 本 人 は 、							

④ 「共通語にはいろいろな問題がある」とあるが、そのうち、筆者が最も強く感じていることとして適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 共通語がどんどん普及していくこと。
- (2) 共通語には地方で通しない言葉があること。
- (3) 共通語にはきめ細かい表現が足りないこと。
- (4) 共通語が都会でしか用いられないこと。

⑤ 「こういうこと」とあるが、その内容を説明している段落として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) ①と②と③と④と⑤の段落。
- (2) ②と③と④と⑤の段落。
- (3) ③と④と⑤の段落。
- (4) ④と⑤の段落。

⑥ 「日本の代表にふさわしいものになるためには」とあるが、そのためにはどうすることが必要か。それを説明した次の文の

--

 に入れるのに適当なことばを、文章中から抜き出して、Iは七字で、IIは十一字で書きなさい。

日本全国の人々の様々な

I

 ことができるようにするために、方言から

II

 こと。

I

--	--	--	--	--	--	--	--

II

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

②

①

 に入れるのに適当な書き下し文を書きなさい。

--

③ 「然り」は、「そうである」という意味であるが、この場合に指しているものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 艱難 (2) 易 (3) 得 (4) 失

④ わたしたちの日常生活の中で、蘇軾が述べている道理に合う事柄を表した次の文の

--

 に入れるのに適当なことばを、二十字以内で書きなさい。

自分の力で苦勞してかせいだお金は、よく考えて大切に使うけれど、親からもらったお金は、

--

 。

検号	
受番	
(算用数字)	
志願校	

(10-J)

第五回 国 語

1 次の文章を読んで、①～④に答えなさい。

言葉には命の長いものと、命の短いものがある。「もの」「こと(事)」「目」「口」「手」「足」「取る」「見る」「来る」という言葉は、日本語の「記録」がある最も古い時代から、ずっと命長く使われてきた言葉である。

①「行くだろう」「行つた」という表現は、古くは「行かむ」「行くべし」「行きぬ」「行きたり」などと言った。「む」「ぬ」「たり」などは文法では助動詞といって非常に多く使われる言葉であるが、「平家物語」に出てくる助動詞は二十八種で、現在はそのうち五種しか使われていない。(中略)

もう一つ、寿命の短い言葉に、②がある。②とは、「はなはだおもしろくない」とか、「かならず行きたい」とか、「ひたすら勉強する」とかの、「かならず」「ひたすら」のような言葉をいう。これらもあまり長い間もたず、新しく使われる言葉としてかわられることが少なくない。

(出典 大野晋「日本語の年輪」)

2 次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。

「やっぱり、③、まだお前には早かつたみたいだなあ」

優しく諭すように言つてやつたが、北斗は引き下がらなかつた。昇平が練習を切り上げそうな気配を察したのだろう、後ろを振り向いたと思つたら、意を決したような声を上げてきた。

「今度は押さえないでよ」

「押さえないでつて……お前、今のままじゃ転ぶぞ」

「いいから、見てて」

そう言つて、北斗はハンドルに向き直つた。その思い詰めたような態度に、気圧され、昇平もその場から動くことができなかつた。

ペダルに足をかけて走り出した北斗が、少し進んでぐらりとよつた。思わず駆け寄りかけた昇平を、足をついて持ちこたえた北斗が振り返つてくる。昇平が近寄るのを制するような視線だつた。父親が立ち止まるのを

④見やり、再びペダルを踏む。

よろよろとではあるが、今度はさつきより少しだけ前に進んだ。北斗は息もつかずにもう一度こぎ始める。

何度も何度も、こぎ出しては足をふくというのが繰り返された。だんだん昇平から遠ざかり、家からも離れていく。もう転ぶ前に駆け寄ることもできない距離になつてた。

べさすにそろそろまずいと思つた。このあたりは道も平らで車の量も少ないからいいけれど、少し進むと急な下り坂なのだ。勢いがついてそこまで進んでしまつては大怪我しかねない。

「おい、北斗！」

そろそろ止まれと言おうとした瞬間——昇平は、急に目が眩んだような気がした。

強烈な既視感に、一瞬息さえ止まっていた。よろけながら走ろうとしている北斗の後ろ(⑤)スガタに、かつての自分を見たような気がしたのだ。

ここだつた。あの時自分が走つていたのも、ちやうど同じ場所だ。——昇平が生まれて初めて自転車に乗れたのも、この風ヶ丘の道だつたのだ。

あの時、昇平は四歳だつた。家の前で走れるようになり、調子に乗つて坂道の方へ向かつていった。

坂道で加速した昇平の自転車は、すぐに自分の力で止まれなくなつた。そのまま坂の下まで走り続け、草太の家の生け垣に突つ込んだのだ。

血の気が引いた。北斗がああ時の自分みたいになつたらと思うと、背すじが氷みたいに冷たくなつた。

「北斗！」

もう一度名前を呼んだ。北斗は振り向こうともせずペダルを踏み続けている。

今すぐ止めなきゃいけないと思つた。駆け寄つて北斗を捕まえるべきだと思ふのに、何故か昇平の体は動かない。胸の奥で膨らんできた思いに、体じゅうが固まつてしまつたようだつた。

かつて坂道に突つ込んだ時、昇平が味わつたのは恐怖だけではなかつた。自転車が加速していく時の快感は今でも覚えているし、身の凍るような恐怖の後にはいくつもの出会いが待つていたのだ。

自転車に乗れたことを見たケネキや、出会えた人々の顔——そんな記憶のかたまりが、頭の中で渦を巻いている。懸命に走ろうとしている北斗のすがたに、いくつもの思い出がよみがえつてくる。(中略)

だからこそ、なんとかして乗ろうとしている北斗の気持ちが痛いくらいによく分かる。

自分から離れていく北斗を止めようと思つ一方、このままどこまでも

(45分)

国(1)			
(2)			
計			

- ① 「記録」と同じ組み立ての熟語は、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 天地 (2) 図示 (3) 地震 (4) 過失
- ② ①に入れることばとして適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) だから (2) しかし (3) つまり (4) または
- ③ 「れる」と同じ用法のものは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 駅まで五分で行かれる。 (2) 故郷が思い出される。
- (3) 母に買い物をお願いされる。 (4) 先生が昔話をされる。
- ④ ②に入れるのに適當な品詞名を、漢字で書きなさい。
- 突つ走つてほしいと願はずにはいられなかつた。息子がアブない坂道に近づいているというのに、今いる場所から一歩も動くことができない。
- 北斗の自転車から、不意に揺れが消えた。飛び立つた小鳥のように、自分の力でまっすぐに進み始めた。
- 「！」
- もう言葉も出なかつた。目を見開いたまま、クランクを回す北斗を見つめていた。
- 時間にすればほんの一瞬のことだつたろう。急に重力が戻つてきたように、北斗の自転車が左によつた。自転車は横倒しになり、投げ出された北斗は地面に手をついている。
- 今度こそ、昇平は駆け寄ろうとした。体は呪縛から解放され、倒れた北斗に向かつて足を踏み出した。
- 次の瞬間、北斗が顔を上げた。そして昇平を振り返り、歓喜の声を上げてきた。
- 「今、ちよつと乗れた！」
- その声に、昇平は再び立ち尽くしていた。何故か急に、涙がこみ上げてきた。
- (出典 竹内真「自転車少年記」)
- (注) 既視感——デジャヴ。経験したことがないのに経験したことがあるかのように感じること。
- ① —線の部分⑥、⑦、⑧を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 「まだお前には早かつたみたいだなあ」とあるが、どんなことが「早かつた」のか。十字以内で書きなさい。
- ③ ④に入れることばとして適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 不安そうに (2) うるさそうに
- (3) 満足そうに (4) さびしそうに
- ④ 「このあたり」について説明したものとして不適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 四歳の昇平が生まれて初めて自転車に乗れた道。
- (2) 昇平が自転車で突つ込み、生まれて初めて恐怖を味わつた坂道。
- (3) 平らで車の通行量も少ない道。
- (4) 少し先に、かつて昇平が突つ込んだ急な下り坂がある場所。
- ⑤ 「胸の奥で膨らんできた思い」について説明したものとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) なんとかして自転車に乗ろうとしている北斗の気持ち。
- (2) 自転車で坂道に突つ込んだときに味わつた恐怖感。
- (3) 坂道に突つ込んでいくときに浮かんだ人々をなつかしむ気持ち。
- (4) 自転車に乗ることで味わつた思いや自転車にまつわる思い出。
- ⑥ 「急に重力が戻つてきたように」とあるが、これとは対照的な様子を比喩を用いて表している部分を、文章中から十一文字で抜き出して書きなさい。
- ⑦ 文章中の()内での昇平の心情の変化を示したのものとして最も適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 躊躇→不安→緊張→歓喜 (2) 不安→緊張→興奮→歓喜
- (3) 不安→躊躇→驚き→感激 (4) 落胆→驚き→不安→感激

検号	
受番	(算用数字)
	志願校

(10-J)

(2)

3 次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。

芭蕉が『おくのほそ道』の旅へ出発したのは元禄二年(一六八九年)春。そのちょうど三年前の貞享三年(一六八六年)春、芭蕉は古池の句を詠んだ。

古池や 蛙飛びこむ水のおと 芭蕉

この句は芭蕉の句の中でもっとも有名な句である。そればかりか、古今の俳句の中でもっとも知られた句である。古池の句なら誰でも知っている。今では芭蕉の名とともに海外にまで知られている。古池の句は俳句の中の俳句なのだ。

ところが、それほど有名な句であるにもかかわらず、この句は謎に包まれている。古池に蛙が飛びこんで水の音がした。誰でもそういう意味だと思っているが、もしそうだとすればおかしなことがあるのだ。

この句は蕉風開眼の句といわれる。蕉風開眼とは芭蕉が自分の句風にめざめたということ。では、この句のどこが蕉風開眼なのか。古池に蛙が飛びこんで水の音がした？ 芭蕉はこの句を詠んで、いったい何に目覚めたというのか。

古池の句にいくら問いかけても何も答えてはくれない。蛙が水に飛びこんだ音が聞こえるだけ。古池の句は蕉風開眼の句であるといわれて、誰もが何となくわかったような気持ちになっているというのがほんとうのところだろう。

ここに支考という人がいる。美濃の人で元禄三年春、近江で芭蕉に入門した。そのとき、三十代半ば。前年秋に『おくのほそ道』の旅を大垣で終えた芭蕉が上方に滞在していたときのことである。(中略)

入門の翌年、元禄四年春、芭蕉とともに江戸にくんだり、元禄七年夏、芭蕉とともに上方へのぼった。上方でも芭蕉に従い、その臨終を看取った弟子の一人となる。

芭蕉が江戸にいた元禄五年春から夏にかけて支考は一人、江戸から松島、象潟へ旅をした。三年前、芭蕉が旅したあとを慕つてのことである。支考が芭蕉にいかにか心酔し、熱心に吸収しようとしていたかがよくわかる。入門以来、支考が芭蕉のもとを離れたのはこのときだけだった。

元禄五年夏、松島、象潟への旅を終えて江戸の芭蕉のもとに帰った支考はただちに『葛の松原』を書いた。旅の形見ともいべき随想風の俳論書である。この本はその年秋、京都の版元から出版される。

『葛の松原』は蕉門初の俳論書であるとともに、芭蕉在世中に書かれたただ一つの蕉門の俳論書である。それよりもっと大事なことは、この本が芭蕉の膝下で書かれたということ。去来によれば、『葛の松原』という題は芭蕉がつけた(去来抄)。つまり、芭蕉が内容を保証したお墨付きの本なのだ。

① その中に古池の句をめぐる一節がある。

弥生も名残をしき比にやありけむ。蛙の水に落ちる音しばくならねば、言外の風情この筋にかびて蛙飛びこむ水の音といへる七五は待給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかぶむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯、古池とはさだまりぬ。

弥生三月、今の四月も末のこと、蛙が水に落ちる音がときおり聞こえてくるので、芭蕉は興をもよおして「蛙飛びこむ水の音」という中七、下五を得た。そばにいた其角(晋子)が「山吹」という五文字を上にかぶせたらどうかと聞いたが、芭蕉はただ「古池」とおいた。「蛙の水に落ちる音しばくならねば」とはもつてまわつたい方だが、「しばしばでない」「頻繁でない」というのだから、「ときおり」「間遠に」というくらいの意味だろう。

ここには古池の句の謎を解き明かす鍵が潜んでいる。まず、「蛙の水に落ちる音しばくならねば」とある。どこからか、ときおり蛙が水に飛びこむ音が聞こえてくるのだ。芭蕉は江戸深川の芭蕉庵の一室にいて蛙が水に飛びこむ音を聞いていた。いいかえると、蛙が水に飛びこむところも古池も見えない。もし、芭蕉が蛙が水に飛びこむところ、あるいは古池を見ていてこの句を詠んだのなら、支考はそう書いたはずである。

次に、芭蕉は蛙が水に飛びこむ音を聞いてます「蛙飛びこむ水のおと」という中七下五を詠んだ。そのあと、其角とのやりとりの末に「古池や」という上五をかぶせた。

私たちはこの句は「古池や蛙飛びこむ水のおと」という全体が「一氣に誕生したものだ」と思いこんでいるのだが、その漠然とした先人観がここで打ち砕かれてしまう。「蛙飛びこむ水のおと」が先に生まれ、「古池や」があとでできた。

では、この「古池や」という言葉はどこからきたのか。『葛の松原』の支考の記述によれば、芭蕉は蛙が水に飛びこむ音を聞いて「古池や」と置いた。このとき、芭蕉は草庵の一室にいて蛙が飛びこむところも古池も見えない。どこからか聞こえてくる蛙が水に飛びこむ音を聞いて、芭蕉の心の中に古池が浮かんだ。つまり、この古池は芭蕉の心の中にある。地上のどこかにある古池ではないのだ。

支考の『葛の松原』には古池の句の誕生にまつわる、このような情報が隠されていたわけだ。整理するところなるだろう。貞享三年春、芭蕉は草庵の一室で蛙が水に飛びこむ音を聞いて古池を思い浮かべた、それが古池の句である。

ここで大事なことは、蛙が水に飛びこむ音が芭蕉の耳に聞こえた現実の音であるのに対して、古池は芭蕉の心の中に現れた想像上の池であるということ。とすると、古池の句は今まで誰も信じて疑わなかった「」という意味ではなかった。現実の蛙が心の中の古池に飛びこむわけにはゆかないからだ。古池の句は詠まれてから三百年間、誤解されてきた名句ということになるだろう。

古池の句は蛙が水に飛びこむ現実の音を聞いて古池という心の世界を開いた句なのだ。この現実のただ中に心の世界を打ち開いたこと、これこそが蕉風開眼と呼ばれるものだった。(出典 長谷川權『「奥の細道」をよむ』)

(注) 上方—京都、大阪地方。蕉門—松尾芭蕉の一門。

去来—向井去来。江戸前期の俳人で松尾芭蕉の弟子。『去来抄』などを編集した。

其角(晋子)—室井其角。江戸前期の俳人で松尾芭蕉の弟子。

草庵—草ぎきの家。

① —線の部分①、②、③の漢字の読みを書きなさい。

① かれて

② 「この句のどこが蕉風開眼なのか」とあるが、その答えをまとめて述べているひと続きの一文を文章中から探し、初めと終わりの五字を抜き出して書きなさい。「」や「。」も一ます使いなさい。

③ 「その中に古池の句をめぐる一節がある」とありますが、この「一節」を現代語に訳した部分を文章中から探し、初めと終わりの五字を抜き出して書きなさい。「」や「。」も一ます使いなさい。

④ 「傍」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

⑤ に入れるのに適当なことを、文章中から十六字で抜き出して書きなさい。

⑥ 「古池の句は……になるだろう」とあるが、どのように誤解されてきたのかについて述べた次の文の に入れるのに適当なことを「現実」「想像上」ということばを使って五十字以内で書きなさい。

実際は、蛙が水に飛びこむ音は と誤解されてきた。

⑦ この文章の内容と合うものは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 古池の句を蕉風開眼の句として世に広めたのは支考である。
- (2) 古池の句は、当初は「山吹や」という上五であった。
- (3) 芭蕉は、古池の句を詠むことで、自分の句風にめざめた。
- (4) 芭蕉は、其角と支考の意見を聞き、支考の意見に従った。